

「親切」の正体

中三

うと考えていた。だから、私はおじいさんの次の言葉を予想だにしていなかつたのである。

「大丈夫です。」

「親切」と「差別」の境界線つて、どこにあるのだろう。電車で席を譲る。重たそうな荷物を持つ。私は今まで、これらの行為が「親切」だと信じて疑わなかつた。

しかし、ある日の出来事が私の価値観を一変させた。その日、私は友達と出かけるために電車に乗つた。向かい側の座席には、私と同じ中学生くらいの女の子が座つていた。私は待ち合わせの駅に着くまで本を読んで暇をつぶしていようと思つていたので、読書に没頭していた。何駅か過ぎた頃、ふと目を上げると一人のおじいさんが乗車してきていた。電車は混雑していて、満席だつた。すると、向かい側の女の子が立ち上がり、おじいさんに向かつてこう言つた。

「よろしければ、どうぞ。」

私は、すばらしいと思つた。道徳の教科書で見たことのあるような光景。とても勇気のある行動だと思うと同時に、私だつたらどうしていただろ

しかも、その声は不機嫌そうですらあつた。女の子も、もう立ち上がってしまつていて座るわけにもいかなかつたのか、座席の一つだけが空いている変な状況になつていて。

私は、衝撃を受けた。私の知つている「よろしければ、どうぞ。」の返答は決まつて「ありがとう。」だつたから。おじいさんはなぜ不機嫌になつたのだろうか。それは高齢者扱いをされていふと感じたのかもしれない。その男性は私や女の子から見れば「おじいさん」だつた。でも本人はそう思つていはないかもしれない。または、足腰を鍛えるためにあえて立つっていた可能性もある。女の子は親切心で勇気を出して声をかけたのに、その「親切」はおじいさんにとってはいい迷惑であり高齢者に対しての「差別」になつてしまつたのかな、と思つた。

「差別」とは何か。その言葉の定義は「偏見などによつて他と区別し、不平等な扱いのこと」。今回、女の子は男性に対して、彼が「高齢者」だ

と思い、席を譲るという特別扱いをした。そして、これは「差別」と受け取られてしまったのかもしれない。

では、「親切」とは何か。それは「相手に対する思いやりがあつてやさしいこと」だそうだ。女の子は男性のことを思いやつて、席を譲るという優しい行為をした。つまり、女の子の行動は「親切」でもあつたのだ。

「親切」と「差別」。一見かけ離れているようだが、実は物事を多面的に見てみると、隣り合っているのかもしれない。私は、あの日の電車内の出来事があつて気付かされた。大切なのは受け手がどう感じるかだ。男性は「差別」されたと思つたから不機嫌になつた。私は「親切」だと思つたから女の子のことをすばらしいと思つた。それだけの違ひなのである。

私はあの一件以来、困つている人に声をかけるのを、今まで以上にためらうようになつてしまつた。拒絶されたらどうしよう、相手を不快な気持ちにさせてしまつたらどうしよう、と考えると声が出なくなつてしまう。

ただ、それだけではダメだということもわかつ

ている。それをどう受け入れるかは相手次第なのだ。行動しないと、「親切」には絶対にならない。行動したら一パーセントでも「親切」になるかもしれないのだ。

そうやって、人を思いやつて行動する人が増えると、「差別」は少しずつ減つていくのだと思う。「親切」と「差別」の境界線。今は曖昧でも確かに存在するこの線がなくなり、いつか「親切」でいっぱいになる世界を一人一人が創つていけたら、素敵なものではないだろうか。